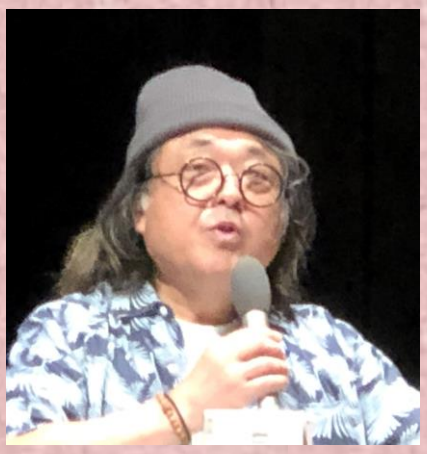
みんなの暮らしぶりから考える
本当の地域づくり

～支えあい・助けあいを地域に返そう！～

　私たちの暮らす地域では、さまざまな人がさまざまなカタチで日常を送っています。そして、その暮らしを応援する、豊かにするボランティアや地域活動があります。
　この分科会では、ひとりひとりの暮らしぶりからつなげる・つながる「まちづくり」をみんなで考えます。



ファシリテーター

お名前　酒井　保さん

所属　ご近所福祉クリエイション

略歴　1961年広島生まれ。知的障がい者施設職員、社会福祉協議会福祉活動専門員、認知症グループホーム・小規模多機能施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設（主宰）。講演・執筆活動を行っている。イラストレーターとしても活動中。「つながりを切らない情報・交流ネットワーク」に「週間マンガつながる通信」を掲載。

書籍等　『「見守り活動」から「見守られ活動」へ』（CLC発行）　『元気を生み出す！ご当地サロン/新しい総合事業大見本市』（CLC発行）『生活支援コーディネーターと協議体』（CLC発行）

ゲストスピーカー

お名前　根本　房枝さん

略歴　長野市に在住。地域で自分たちも一人の住民として「そこで暮らす地域の人たちと生活したい！」と熱い想いを持って、サロンを立ち上げや婦人部の部長など、幅広く地域で活動中。県下初の電話交換手。

お名前　山口　和子さん

略歴　長野市の視覚障がい者への朗読ボランティアグループ「やまびこ会」会長。目の不自由な方たちに耳からの情報を送ることで、少しでも社会参加のお手伝いができたらと活動している。

参加する皆さん！

ぜひ、普段感じている思いや悩み、課題などみんなで共有して考えてみませんか。

視覚障害者への朗読ボランティアグループ

や ま び こ 会

代表　山口　和子

昭和 58 年、目の不自由な方達に耳からの情報を送ることで、少しでも社会参加のお手伝いができたらと発足しました。視覚障がいの方達の日常生活の自立支援、社会参加の支援のための朗読テープ・CD 作りをしています。

【会員　46 名　（男性　3 名・女性　43 名)】

◆視覚障害者へのボランティアには

- 朗読（音訳）
- 点訳
- 外出ガイド
- 拡大写本

◆主な活動

- やまびこテレホンサービス　(224－1122)　・・・・・・・・・・毎日
- 情報テープ・デイジー“長野だより”“かわらばん”作成　・・・月 3 回
- 市議会だよりテープ化・デイジー化・・・・・・・・・・・・・・年 4 回
- 視障協通信テープ化・デイジー化・・・・・・・・・・・・・・・年 4 回
- 信濃毎日新聞連載小説（朝刊・夕刊）テープ化・デイジー化・・月 4 回
- 依頼された図書のテープ化・デイジー化・・・・・・・・・・・随時
- 対面朗読・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・随時
- 利用者との交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・年 1 回
- 勉強会
- その他

◆◆◆　●●●　◆◆◆　●●●　◆◆◆

障がいを持ったということは不便ではあるが不幸ではない。不幸であってはならない。

⇒応援してくれる人達がいるということは、生きていく自信につながる。

⇒生きていけるんだ！

生きていてもいいんだ！

2016.7

言葉ボックス

のみ出禁止にしたい言葉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

☎026-236-3143 ✉kurashi@shinmai.co.jp

点字ブロックの上 歩きスマホと衝突

視覚障害者の被害 県内でも増加

白杖（はくじょう）を持ち点字ブロック上を歩く視覚障害者が、スマートフォンの画面を見ながら向かって来た人とぶつかる―。そうした事例が近年、県内でも増えているようだ。当事者や関連団体によると、点字ブロックを目印に「歩きスマホ」をする「点ブロスマホ」という言い回しまであるという。そうした行為は意図的かどうかにかかわらず、人に危害を加えたり、自分が事故に遭ったりする可能性がある。点字ブロックの意義も、あらためて考える必要がある。（中村 真希子）

長野市の女性(42)は弱視で視野も狭く、外出には白杖を用いている。8月下旬、JR長野駅前の広い歩道で、歩きスマホ中だったとみられる男性と衝突し、転倒。白杖は車道に転がって破損した。ぶつかった際、近くで目撃した人が相手の男性にも声をかけ、呼び止めてくれたが、男性は「お金がない」と言い訳をしてすぐに走り去ったという。女性はタクシーで帰宅。白杖は自費で新調するしかなかった。

幼少期から失明の恐れのある網膜の病気や斜視があり、視力矯正によってある程度は見えていた時期もあったが、次第に病気が進行。現在は両目とも視力0・04程度で、視野は狭い。眼科通院などで定期的に市街地に出るが、最近4カ月だけで複数回、点字ブロック上で人とぶつかる事故に遭っている―と証言する。

歩きスマホとみられる人とぶつかった場所を歩く女性。足に傷が残り、白杖も新品を取り寄せた＝長野市

「周囲への注意や配慮 失われている」

長野駅前は、路線バス停留所が並ぶロータリーに沿って点字ブロックが敷設。バスを待つ人がスマホを操作したままブロック上に立ったり、手荷物を置いていたり。歩きスマホのままスクランブル交差点を渡る姿もある。

県視覚障害者福祉協会（事務局・松本市）には、「歩きスマホの人とぶつかった」「自転車とぶつかり白杖が破損した」といった報告がたびたび寄せられる。特に長野、松本両市のように人通りが多い道路では、点字ブロックが整備されている一方、歩道の幅が広い。青木勝久理事長(74)＝長野市＝は「安全だろうと前をあまり見ずに向かって来る人が多い」と指摘。「行政や警察に対策を求めても、実際は改善されないまま。歩きスマホは子どもや高齢者にとっても危ないので、やめてほしい」と訴える。

日本視覚障害者団体連合（東京）によると、最近、周りをよく見ずにスマホ画面に没頭する人が、足の感覚だけで方向を外さずに―と点字ブロックを進む場面を見聞きするようになったという。吉泉豊晴情報部長(64)は、路上だけでなく、例えば階段の手すりのそばで立ち止まってスマホを操作する場合も障害者らにとって非常に危ない―と説明する。

スマホの普及に伴い、この10年余で歩きスマホとみられる人とぶつかり、さらに暴言や暴力を受けた視覚障害者が出ている。吉泉さんは「点字ブロック上だけの問題ではなく、スマホを操作して周囲への注意や配慮が失われている」と懸念する。

長野市の女性は、今回の件で警察に被害届を出そうかとも考えたが、相手の特徴が分からず「諦めた」。以前から歩きスマホを恐れていたといい、「相手が障害者なら逃げ得、とされるような社会は嫌です」と悔しがる。かかりつけ医とも相談し、外出に同行・支援する福祉サービスが受けやすいよう、身体障害者手帳の申請手続きを進めている。